

Shape

-Operation 0-

深々と積もる雪と身を刺すような寒さが、夜の荘厳さを侵すことを厳しく咎めるかのように、人や獣を各々の住処へと押し込めている。それだけでなくも午前二時という時間は、本来草木も眠る時間である。余程の理由がある者を除けば、外を出歩くような輩は居る筈もない。

だが、純白の景色を暗い色でくり抜いて、氷点下の中をそぞろ歩く人影が一つ。無垢の絨毯に奇跡を刻むのは、年不相応に草臥れた少年であった。

毛糸の解れた手袋と襟巻。野暮ったい厚手の外套と長靴も、擦れて生地
の表面が毛羽立っている。作りは十人並み以上といえる女性のような顔つ

きも、擦れた物を見てきたかのような乾いた眼差しのせいで、どうにも貧相な印象の方が先に立つ。

少年は、肩に積もった雪を手で払い落とすと、外套の衣囊から缶コーヒーを取り出して両の掌を温めた。つい先ほど通りがかりに見かけた自販機で買ったものである。白銅硬貨と青銅硬貨が合計で三枚必要だった。財布が寒くなつた分を取り戻すべく、手袋越しにその温かさを味わった。そして十分に堪能した後、いよいよ次の段階、今度は体内を温めるべく行われる筈の一連の動作は、タブに指を掛けるという最初の段階で中断される。

「——from su………of love …… ……roa……」

微かに聞こえてきたのは、呟くような、だが美しい音の連なり。雪の合間を縫って、彼の耳に届いたそれは、一条の旋律。今までは彼自らの立てる足音に隠れていたもので気付かなかつたが、さらに澄まして耳を傾けてみ

ると、その旋律は詩の付いた歌であつた。どうやら、風の悪戯を音楽と誤解したわけではないようだ。

「Call…… to……d…… c……in…… to……」

少年は温もりを再び元の位置に収める。

もしかすると、自分以外にもこんな夜に外を出歩くような奇特な人間が居るかもしれない。興味に惹かれるままに、ハヤテは歌声の方へと足を踏み出した。

「Jesus is callin…… weary to res……」

さくりと、雪を踏みしめる度に、靴の音が歌声の合間に相の手を打つ。近づくにつれ、降りしきる雪のようにおぼろげだった歌が、少しずつそのたおやかな輪郭を露わにしてゆく。

そうして辿り着いたのは、さなきだに人を嫌う雪夜の中でも、一際侘し

さの漂う公園。日の出た時間帯でも余り人の寄り付かぬそこで、錆びついた鎖に吊るされた、遊具の椅子の上に腰かけているのは、一人の少女だった。

街灯に淡く照らされているのは、雪が人の形を成したかのような白い肌と、白銀の髪。そんな人間離れした容姿だからだろうか、襟巻も巻かぬ寒そうな出で立ちには、むしろ雪の夜に溶け込んでいる。

「——Calling today, calling today, Jesus is calling, is tenderly calling today……」

ひとしきり歌い終えた少女は、ようやく来客に気付いたのか、伏せられた睫毛を起こすと同時に、陶器のような白貌にほんのりと朱を浮かばせる。

途端、少女の冷たい印象は鳴りをひそめる。

「ええ、と……聞かれ……ちやいました……よね」

少女は粗相を言い訳する子供のようになり、紅玉の瞳を左右に彷徨わせる。

問いは、何もかも聞かなかったことにしてほしい、という期待を込めたものだった。

「ええ。魅力的な歌声ですね」

だが少年は素直に感想を述べた。どうにもこの少年、女性の心の機微に鈍感なようだ。

それに、彼は殆ど無条件に公園で一人きりになっている少女を放っておけない、という呪いに掛かってしまっている。無論、少女がそれをあたり知ることは出来ないが、相手が容易には立ち去ってくれない奇特な人間である事だけは想像に難くない。

「……うう、やっぱり」

少女は雪の肌を紅葉のようにして、俯く。

「そんなに恥ずかしがらないでください。お上手でしたよ。讚美歌 517 番、ですよね」

「我に来よと主は今」の邦題で親しまれている、主の慈愛を讃える歌である。少年はキリスト教徒というわけではないが、一応最小限の讚美歌は知っている。耳に馴染みやすいこの曲を、記憶の倉庫から探り当てるのは容易かった。

「……うん」

観念して、少女は卵型の頤を縦に引いた。

歌を褒められて気を良くしていたというのものもある。決して、彼女は抜きんでて上手いというわけではないと自負している。だから、多少は世辞も

交じっていることは解っていた。しかしそれを差し引いても自分の歌に好感を持つてくれていることは、真摯な眼差しから知れた。

「良い夜ですが、余り長居すると喉を傷めますよ」

少年はざっと辺りを検めた。足跡は一人分しか無い。少女のコートは、厚手で生地も良さそうだが、氷点下の気温にいつまでも耐えられるようにはお世辞にも見えない。

「人を、待っているのです」

少年の柳眉の根元に浅く溝が刻まれる。こんな日に、一体誰がいたいかな少女を外に放置していると言うのか。

「ああっ、違うの。私が勝手にやっていることだから」

慌てて取り繕う少女。嘘、ではなさそうだった。

「……はあ」

少年は息を吐きだすと、衣囊の中へ乱暴に手を突っ込んだ。

びくり、と肩を震わせる少女。その胸へ向けて、缶コーヒーを放る。

「わ、わ。わわっ」

咄嗟のことに反応の遅れた少女の手袋の間で、缶が跳ねた。危うく取り落としそうなる寸前で、少女はようやくやくはっしと捕まえる。じんわりとした温かさが、掌に広がった。

「今日は確かに良い夜ですが、ただ待つには寒すぎます」

「私は寒さにも慣れてしまったけれど」

出会ったばかりの人間にここまでされる道理もない。おどおどと遠回りに拒否しようとした少女に、少年の問答無用の笑みが押し掛かる。

「それでも、こうした方が温かいのは確かですから」

戸惑う少女の首に、ふわりと襟巻が巻かれる。

ちくちくと繊維が首を刺す感触。少年の体温が残る毛糸は、包み込むようにして少女に温かさを分け与える。

「うええええええ」

好意を無下にもできず、少女はただ混乱するばかり。

「僕の趣味みたいなもので、どうか受け取ってください。でなければ、こちらも困ってしまいます」

「趣味って……人助けが、ですか？」

「正確には、寒そうな人に、温かさを分けてあげることが、ですかね」
少年はおどけたように肩をすくめて見せる。

「ふふ。随分と限定的なんですね」

思わず笑いを洩らしたことに、誰よりも少女自身が驚いていた。普通は見ず知らずにも等しい人間に、ここまで親切にされたら、感謝どころか警

戒するところだ。無償の好意ほど高くつくものは無い。だと言うに、旧知の間柄のように心を許してしまっている自分がいる。

「我ながら変わっているとは思いません」

「ううん、素敵だと思う」

少女も、思ったことをそのままに、言葉にする。気取った台詞もきつと彼にはきつときほどの事でもないのだろうと思っていた。だが、意外にも少年は鼻面を指先で搔いて照れたような仕草をした。

少年はその表情を隠すように、視線を腕時計に落とす。長居をしたつもりはなかったのだが、分針は跳躍でもしたかのように随分とその位置を変えていた。

明日も早い。名残惜しくとも、帰らねばならない時間だ。

「まだここに？」

「うん。もう少しだけ」

少女の声は控えめだが、決して意思を曲げるつもりはないようだった。二度目の溜息を小さく吐いて、少年は外套の襟を詰める。

「でしたら、その襟巻も差し上げますよ」

質がいいとは言えず、気休め程度だが無いよりは幾分ましだろう。

「でも……いえ。うん、ありがとう」

顔をその中に埋めて、頬を緩める少女。

「……また、いつか会えたら、その時はこのお札をさせてください」

別れの挨拶は簡潔に。縁は繋がった。同じ街に暮らすのなら。顔を合わす事もあるだろう。

「ええ、それではまた」

去りゆく少年の背を、少女は小さく手を振って見送った。

それから、少女の下に再び訪う者が訪れたのはコーヒーが底をつき、少年の足跡が雪で上書きされた後だった。先程の細いシルエットの少年とは対照的な、巖を削り出して作り上げたような偉丈夫。落ちくぼんだ眼の奥から覗く、枯れた瞳。赤いニット帽からは、短く刈りあげた白髪交じりの黒髪が覗く。

筋者の如き威容を前に、だが少女はぱつと、明るい笑みを浮かべた。

「お疲れ様。父さん」

「ああ、済まない。すっかり遅くなってしまったな」

地鳴りの如き低い声。華奢な花を思わせる少女とは、余りに不釣り合いな男だった。

しかし、少女は父の不器用さを弁えている。父とて、わざわざここに寄らずに帰っても良かったのだ。なのに、仕事を終えたばかりの、疲れ果てた体を引きずってまで迎えに来てくれる。

「冷えただろう。今日はもう帰ろう。仕事のことは、道すがらでも話す」
「うん。一緒に帰ろう」

少女はハミングを交え、上機嫌に足跡を刻んでいく。子犬のように息を弾ませるその姿に、男は気取られないように目尻の皺を深くする。

「楽しそうだな」

「そうかな？」

「……ああ」

父子の会話も、やがて雪化粧の彼方へ。後には何も残らず、程なくして人が居た後も消え……しかしきつと彼女は、ここを訪う度に今夜を思い出

す事だろう。あの奇妙なまで親切な、名前も知らない少年との、一時の逢瀬を。

未だ降りしきる雪は、あたかもその下に埋もれていく思い出を保管してくれているようだった。